

次の百年をめざしてー甦った東京駅

工事用シートが外された東京駅丸の内駅舎はもうご覧になっただろうか。格調あるドーム屋根や赤煉瓦の壁、背後に控える八重洲の近代的なビルとは対照的に、重厚な外観は存在感を放っている。保存・復原工事によって当時の面影を再現しながら、新しく生まれ変わった、その雄姿をじっくり眺めてみたい。

大正三年、華々しく誕生した東京の顔

「この駅はあたかも光線を放射する太陽のようなものだ。あらゆるものの中心となって、ここから光を四方八方に放つてほしい」大正三年十二月、時の首相大隈重信は東京駅の開業にあたってこのような祝辞を述べた。長さ三百mを超える巨大ターミナル駅は当時日本では例をみない建造物であった。工事に動員された職人や作業員は延べ七十四万人、設計は英国留学後、当代随一と評判の高かった辰野金吾が起用されるなど、近代化を目指した国の一大プロジェクトであった。

当時の最先端の西洋建築技術が盛り込まれた東京駅は、頑丈な鉄骨レンガ造で高い耐震性を持ち、関東大震災にもほとんど無傷だったが、昭和二十年の戦災で三階より上部が焼失してしまった。戦後に二階建てに再建され現代に至るが、その間には赤煉瓦駅舎を解体し高層ビルに建て直すという案も浮上した。しかし時代の流れとともに、歴史ある建築物の価値が見直されるようになり、平成十五年には国の重要文化財に指定される。そして、駅舎の保存・復原工事が行われることとなった。

次の百年をめざした復原工事



東日本旅客鉄道(株)
建設工事業部
(現・東京工事業務所)
課長 小澤 成昭氏

工事の内容についてJR東日本・建設工事業部の小澤課長に話をうかがった。

「駅舎を解体して建て直すのではなく、現存している駅舎を可能な限り忠実に保存・活用し、創建時の姿に戻すことを目指しました。そのため今回の工事は「修理で改造された部分を原型に戻す」という意味で「復原」という字を用いています」

主に復原された部分は、戦災時に焼失した屋根と三階の外壁、南北ドーム内部の見上げ部となっている。また新たに手を加えた部分は、地下一階、二階を新設し駐車場、機械室等を設けたこと、耐震性を向上させるため地下には免震層を設けて免震装置を設置した。

創建時は辰野金吾が設計の指揮をとったが、現代においては何を基準にして工事を進めたのだろうか。

「学識経験者と役員などによる委員会を十年間、継続して行い議論を重ねました。そこで決めた基本方針として、「当時施工されたものは残し、手を加えるものはそれを明示する」ということです。

例えば柱の補修では、手を加えた部分に刻印を刻んだり、赤煉瓦の補修では、補修したことがわかるよう欠陥部をピンで固定する方法を選択しました」

手を加えた部分を明示するのは次の工事のときの目印とするためだが、今回の補修で今後百年、東京駅の



鹿島建設(株)
建築管理本部 建築技術部
技師長 高村 功一氏

当時の工法で施工するには、職人が必要になる。創建時の詳細な仕様書が残されているが、それには

用しています」

「銅の施工法も可能なかぎり創建時に近づけました。「なまし」、「たたき」、「はぜ掛け」、「しほり」など。カーブのあるところは全てなましとたたきで成形しています。施工法に合わせて、たたきを行うところは○・四皿厚か○・六皿厚の銅板を、一般部は○・四皿厚の銅板を使用しています」

こう話すのは同社建築管理本部建築技術部の高村技師長。

施工を担当した鹿島建設(株)にうかがった。「外観で輝いてみえるところは皆、銅を使っています。屋根の飾りやパラベット、バラスト、避雷針を兼ねたフィニアル、時計まわりの飾り、尖塔、縦樋、庇など、創建時に使用された部分は同様に使用しています。銅の総使用量はおよそ百トンくらいでしょうか。銅は意匠性の高さだけでなく、その加工性の良さが魅力です。曲面に対応できるのは銅だからこそです」

職人の手作業により施工された銅板

「職人頼りの工法なので、職人集めは苦労しましたね。現代においては、ある程度の金属加工ができる職人は数が限られています。北は青森から南は佐賀まで、全国から呼び寄せました」

「銅工二万二六四七人」と記されている。当時、かなりの数の職人が従事したことがうかがえる。東京駅の美しい銅の飾りは、職人の手仕事によって施工されていたとは驚きである。

銅板の施工

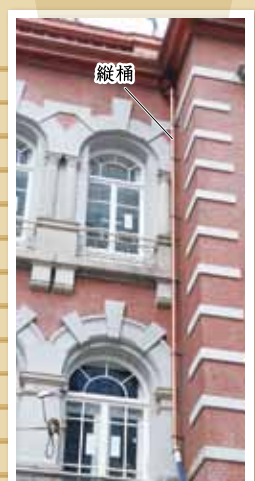


職人の手作業によって、銅板は施工された。

「施工において助かったのは、当時の詳細な仕様書が残っていたことです。私はこれまでいくつかの歴史的建造物の復元に携わってきましたが、これほど信頼できる資料が多数残っているケースはそうありません。また、当時の設計者のレベルが非常に高かったと感じます。今では考えられませんが、当時は現場で使う原寸図を設計者自ら書いていました」

全国から集められた銅職人。手間暇をかけて施工された銅の飾りは、今後、自然に色が変わり重厚な趣に変わっていくことだろう。百年後に再び手が加えられる時、現在の手仕事に感嘆される日がやってくるかもしれない。それほど、今日に甦った東京駅は美しく、輝いている。

● 東京駅丸の内駅舎に使用された銅



バラストー
バラストーは絞りで成形している。